日本の住まい

森 隆男

1 住まいとは

(1)住まいの研究の現在と魅力

住まいの研究は今まで主に建築学の分野で進められ、復元図をもとに編年がおこなわれて、近世以降の歴史が明らかにされてきた。地理学では外観や間取り図をもとに住まいを類型化し、全国的な分布が把握された。これは住まいの系譜をさぐる上で重要な示唆を与えることになった。一方、民俗学では住まいに関わる民俗語彙が収集され、さらに火に関わる習俗などの研究がおこなわれたが、住まいそのものが主要なテーマになることはなかった。また、考古学では家屋文鏡や家型埴輪、歴史学では中世に作成された絵巻物を使用した研究成果も発表されている。

民俗学を基本にしている私は、各地に残された民家の実測調査と聞き書きにより研究を進めてきた。具体的には、屋敷や建物に日常生活や儀礼の際の情報を重ねて、変容に留意しながら住まいを空間的に把握する方法である。

住まいは所在する社会の諸条件に影響を受けて形態や間取りが決定され、その点で社会的産物であると言

える。今後多様な視点で研究が進めば、その成果が有効に活用されるはずであり、住まいの研究は多くの可能性を秘めていることは間違いない。

(2)魂を持つ住まい

住まいは単なるモノではなく、心を持った家族の一員として受け止められていたことは重要である。住まいの建築に当たっては多くの儀礼がおこなわれるが、棟上げの終わったあと棟木に弓矢を取り付ける。建築直後の住まいは弱い存在と意識され、魔除けの装置が必要であるという。また、その日の真夜中に棟梁が一人棟に上がって棟木を槌で打ち、魂をこめる儀礼をおこなうことが報告されている。さらに棟梁には、人の誕生における産婆のように盆と暮れに贈り物をする。なお、沖縄では台風や地震の際に家人が退去すると、住まいは見捨てられたとして自壊すると信じられている。

(3)地域社会でつくられ維持される住まい

住まいは財力や社会的ステイタスを示す個人の力の象徴ととらえられることが多い。しかし新築は「普請」と呼ばれたように、かつては多くの人から資金や材料、労力の助成を受けておこなわれるべきことであった。残存する「普請帳」には、建築年とともに助力を受けた人の名前と内容が記され、これらの人が普請をする際にお返しをするための記録であったことがわかる。また新築はもちろん屋根の葺き替えの際に多くの茅が必要となり、お互いに茅を融通しあう「茅講」がつくられていた。

2 空間構成

(1)原　型

住まいの原型を考える時、動物の巣と比較すると理解しやすい。巣は天敵から身を守るカクレガ、寝処、子どもを生み育てる場所である。住まいの基本的な機能も同様である。しかし巣は一組の雌雄のペアとその子どもが構成員であり、それ以外の個体の侵入が拒否される。それに対し、住まいには複数世代の夫婦と子どもが住み、さらに客として他人が招き入れられる。住まいと巣の違いは、人が複数世代の親子を軸にした家族を形成し、さらに社会生活をする中で獲得した接客機能を付加したことである。これは物理的に、また精神的に閉鎖的な空間から開放的な空間への変遷とい

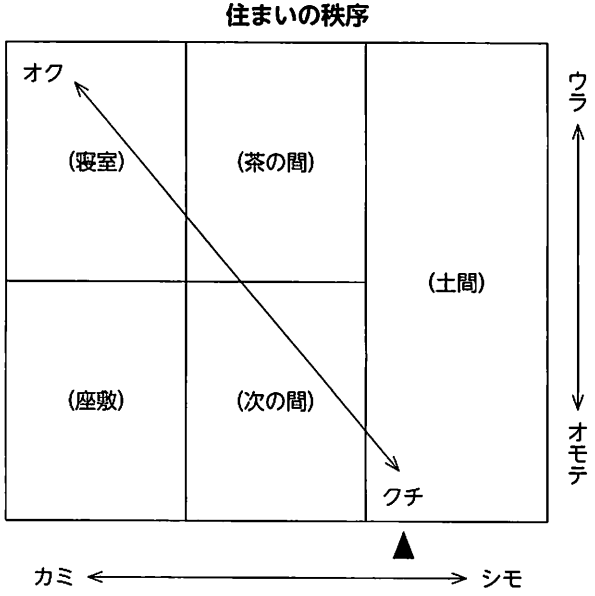
う形で現れる。

さて住まいの古態について、私は神の住まいとなる祭祀施設の構造に着目して、原型が寝室であり、そこに接客空間が付加されていったと考えた。祭りの古態を伝える頭屋儀礼の中で、御仮屋と呼ばれる神のための臨時のゲストハウスがつくられる。多くの場合、周囲を杉や檜の枝で囲った閉鎖的な構造をとる。ここに古代から中世の住まいに見られる塗籠と共通する要素を認めることができるからである。

また出雲大社や住吉大社には、閉鎖的な寝室を想起させる部屋に加えて司祭者が控える部屋が付加され、接客空間の出現が見られる。このように遷宮を通じて古代の形式が維持されてきた神社建築や臨時の祭祀施設に、すでに失われた人の住まいの歴史を見ることが可能であろう。

(2)秩　序

複数の部屋で構成される住まいには、オモテ―ウラ、カミ―シモの方位があり、これらの方位を示す二本の軸が直交して秩序を創出している。オモテには「男性」「公」「外」の属性が、ウラには「女性」「私」「内」の属性が認められることが指摘されている。



また町屋は「うなぎの寝床」と呼ばれるように、間口が狭く奥行きの深い敷地に、通り庭に沿って部屋が並ぶ母屋が建てられる。そして小さな庭を挟んで奥に客座敷や土蔵が設けられることが多い。京都の町屋の構造からは、通り庭の部分にはオモテ―ウラが、それに平行してオモテ―オクの異質な秩序を形成する軸が

併存するという興味深い指摘がある。上田篤は町屋の構造をハレ、ケ、スキ（数寄）に区分した。親しい人と過ごす数寄、すなわち趣味の世界が通りから最も離れたオクに配されていることになる。

さらに私はクチ―オクという秩序に強い関心を持っている。これは住まいの変容を考える場合や、前出の住まいの開閉を考える有効な視点になる。クチ―オクの秩序として伝統的な住まいを見たとき、クチは玄関、オクには寝室が配されている。そして重要な客はオクの座敷に招かれることになり、まさに「オクへどうぞ」の言葉がこのような空間秩序を前提に発されていることがわかる。

住まいには、入り口、簡易な接客、正式な接客、食事、団欒、調理、貯蔵、排泄、収納、就寝など多様な機能とそのための部屋や設備があり、それらが有機的に配置されている。ここに人の動線を重ねると、時代や地域、階層による差異が抽出できる。

(3)都市の住まい

近代に入って洋風住宅がまず上層に、そして大正に入ると都市のサラリーマンを中心とする中産階級に和洋折衷の住まいが普及していった。しかし実態は客間のみを洋間にして、日常生活を送る空間は伝統的な和風であった。

大正中期から昭和初期にかけて、「田園都市」の名称で開発された住宅地があった。「田園都市」は一九世紀末にイギリスのハワードが提唱した観念で、理想的な街づくりを目指すものであった。しかし日本では単に緑豊かな郊外住宅地として解釈され、関東では多摩川住宅地（のち田園調布）、関西では吹田市の千里山住宅地、堺市の大美野住宅地などが開発された。

私はこのうち千里山住宅地を取り上げ、田園都市の意味を考察したことがある。これにより、伝統的生活様式を捨てきれない都市の人びとの住居観を抽出することができた。たとえばロータリーと放射状の街路が整備された西洋風の街に和風の住まいが建てられ、洋間の食堂の隅に仏壇を安置した住まいを見ることができた。

また希薄な地縁関係の中で、玄関付近に応接間を配置して家族の生活空間に客を入れない構造も浮かび上がる。田園都市は、大正という比較的自由に思考することが許された時代に、理想的な街と住まいを追求した点で意義深い。

一九六〇年代から始まる高度経済成長期に、地方の人びとが都市部に流入して都市が膨張するとともに、そこに居住する人が急増した。長く日本の住まいの研究は農家が対象になってきたが、公団住宅やマンションの研究が求められることになった。当然、その原型とも言える長屋の研究も重要になる。

地方の農山漁村と都市部では、生業はもちろん家族の構成や地域社会での交際など異なる部分が多い。新しい視点での研究が俟たれるところである。

3 系譜

(1)分棟型と集合型

南西諸島では、炊事場が母屋とは別棟になっているほか、便所や家畜小屋なども敷地内に別棟で建築され、それぞれの建物は小型である。このような分棟型の住まいは、九州南部から東海、関東地方の太平洋岸に分布する。それに対し列島の中部以北には、岩手県の南部地方の曲屋のように生活の機能をすべて大型の母屋に集合した住まいが分布している。

このような傾向を説明する理由として、冬季の寒さなど気候に求めることが多いが、そのほかに南西諸島で強く意識される火に関わるケガレ観が竈を設ける建物を別棟にすることなど、多様な視点で検証することが重要であろう。

(2)高床と土座

伝統的な農家の住まいを訪ね玄関を入ると広い土間が広がり、そこから床上の畳の客間に招き入れられる。土間と床がセットになった住まいが基本であり、現在の洋室を主体としたマンションでも、玄関には靴脱ぎのための土間が設けられている。しかし八重山地方から奄美地方にかけて、前庭から踏み台を経て直接部屋に入る土間のない住まいが分布する。

一方、北陸地方から東北地方にかけて、かつて床のない「土座」と呼ばれる住まいが広く分布していた。その貴重な実例が、大阪府豊中市の日本民家集落博物館に移築されている秋山郷（長野県と新潟県の県境付近の地域）の民家である。地面に茅などの植物を置き、その上に莚を敷いた床を持たない形式である。近世後期にこの地を訪れた鈴木牧之の『秋山記行』に、土座での生活をビジュアルに描いた図が収録されている。土座が見られた理由について、藩の政策や床に使用す

る板材の入手が高価なため困難であったなどの理由が挙げられている。しかし、それが比較的遅くまで残存した背景には、土座がつくる住感覚の存在も無視できない。

このように日本列島には高床に代表される南方の住文化と土座に代表される北方の住文化が、列島の中央部で対峙していた時代があった。

(3)閉鎖的な石塀を持つ住まい

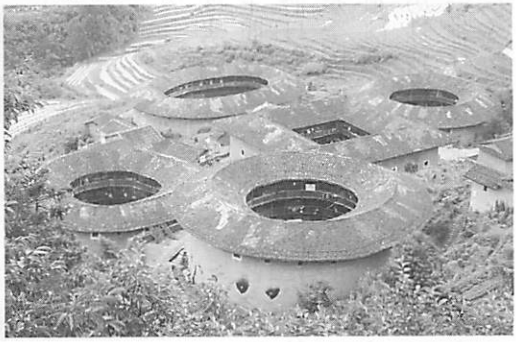
敷地の周囲、またはその一角を石塀（本稿では敷地の造成時に築く石垣と区別するため、この語を使用）で囲む事例が南西諸島から西日本にかけて見られる。とくに南西諸島ではほとんどの地域で見ることができ、ヒンプン（母屋の前に設けられた目かくしのための塀）とともに独特の景観を創出している。

高取正男は列島の周縁部に屋敷林に囲まれた住まいが多く分布していることに着目し、かつて森で生活をしていた名残りではないかと推測した。この当否はともかく、私は高取の指摘した住感覚に注目している。前出のように住まいの閉鎖性は本質的なものであるが、石塀を持つ住まいは住感覚に基づいて伝承されてきた住まいの型、すなわち文化と見ることも可能ではなかろうか。

中国北部で異民族の襲撃と寒冷な気候から家族を守るために生まれた漢民族の三合院形式や四合院形式の住まいは、中庭の周囲を建物で囲む閉鎖的な構造である。漢民族の南方進出にともない福建省で築造された土楼の住まいも、基本的な構造は同様である。先年、台湾の新竹を訪れて見学を許された客家の住まいも三合院形式であった。気候条件が変わっても閉鎖的な住まいをつくってきた背景の一つに、私は住感覚の存在を考えている。

列島の南半分に分布する石塀を持つ住まいについて、強風対策であるとしても、その深層に住感覚、そして中国文化につながる系譜を認めることも可能ではなかろうか。

漢民族の土楼（中国・福建省．高増明氏撮影）



4 神々との同居

(1)秩序を持った神々の領域

住まいには神棚や仏壇が設置され、日々、拝礼がおこなわれている。神棚の起源は中世末期の伊勢御師の配布した祓いの札の収納設備に求めることができる。仏壇もまた近世初期の寺請制度の所産である。いずれもその歴史は比較的新しいと言わざるを得ない。

一方、住まいには正式な名前を持たない神々が各所に祀られている。これらの神々が家族と雑居しているようなイメージがあるが、前述のように各部屋の配置にクチ―オクの秩序が認められ、部屋の機能に応じて役割が期待された神々が配置されていることがわかる。さらに床に安置された仏壇は座って拝み、鴨居の上に設けられた神棚は立って拝むように、垂直軸上の秩序も見られる。神と人は秩序のもとにそれぞれの領域を持ち、同居していると言えよう。

(2)出入り口

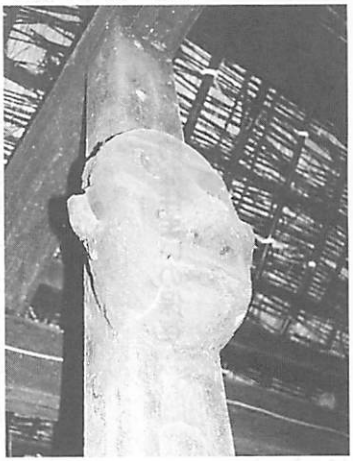
クチに相当する玄関には、魔除けの機能を持つ装置が見られる。夏祭りで授与される粽型や茅輪などがある。奈良県や三重県などで見られる米寿の手形は、長寿の肉体に宿る生命力を魔除けに転化したものである。節分に焦がした鰯の頭を柊の枝に刺して戸口付近に差し込む習俗は全国的に分布する。寺社が発行する御札を魔除けにする場合も多い。

魔除けを期待された米寿の手形（奈良県天理市）

(3)土　間

土間は作業の場であるとともに調理の場であり、竈が設けられる。田植の際に、竈神に苗を三把供える習俗が全国的に見られる。正月には鏡餅も供えられる。竈神は単に火の神にとどまらず、食生活に関わる家の神の性格を持っている。竈付近に貼られる三宝荒神や愛宕神社、秋葉神社の御札には火伏せの役割が期待されている。

恐ろしい顔の竈神（宮城県加美町）



宮城県や岩手県では竈付近の柱にカマジンと呼ばれる木製の面が掛けられている。恐ろしい顔貌には威力ある火のイメージが投影されている。

(4)井戸・便所

井戸の神は火の神と異なり日常はとくに意識されることは少なく、正月に張られた注連縄がその存在を示す。また井戸は他界への通路と考えられてきた。たとえば麦粒腫（ものもらい）ができたとき、ザルを半分井戸枠に乗せ、「治してくれたら全部見せる」と唱える習俗がある。これは多くの目を持ち、ふるい落とす機能があるザルと、他界につながる井戸が重なったことで生まれた俗信であろう。

便所の神にも境界の神としての性格が認められる。便所の異称「厠」は「川屋」であり、水の流れの上につくられた施設が原型である。川の流れを利用して他界からやってくる生命の通路の一つが便所で、この場所に祀られる神がお産の神になったのであろう。東日本に見られる「雪隠参り」の習俗も、このような他界観が前提にあって成立していると言える。

火や水の神は祭祀の方法を誤ると祟りをなす精霊的な性格を持っている。このような点にも生活に密着した神々の古い歴史をうかがうことができる。

(5)茶の間

日常生活の中心になるこの部屋には、いろいろな神が祀られる。伊勢神宮や氏神、有名神社の御札を納めた神棚が鴨居の上に設置され、朝夕に拝礼がおこなわれる。囲炉裏をめぐる主人の席は、神棚を背にする位置であることが多かった。恵比寿・大黒などの縁起棚も茶の間に設けられる。

静岡県より東側の地方では、茶の間に仏壇を設置しているところが多い。祭事のご馳走はもちろん、到来物はまず仏壇に供える。祖先に見守られた生活が茶の間で展開しており、西日本の仏壇が客間である座敷に設置されることと対照的である。東日本の方が、祖先との精神的な距離が比較的近いと言えよう。

(6)寝　室

寝室に祀られている「納戸神」が中国・四国地方に分布しており、寝室も神祀りの場であったことがわかる。これらの調査報告は半世紀以上前のことであるが、二〇一一（平成二三）年に岡山県美作市を訪れた際に、昭和の終わりまで寝室で祀られていた「歳神」と呼ばれる女神の神棚を実見したことがある。

長野県木曾地方でも、寝室やその奥に「荒神」と呼ぶ神を祀っている。この神は家の危機に際して音を立てて知らせるという伝承もある。また中世の史料にも、主人の夢の中に子どもの姿で現れた神が事前に火事を予告し、大きな被害を免れた話が収録されている。

住まいの奥に女性や子どもの姿の神が住み家を守る信仰は、かつて広く分布していたと思われる。座敷童子も同じ系譜につながる神であろう。

5 伝統的な住まいの保存

戦後の高度経済成長期以後、老朽化した住まいの多くが取り壊され、新しい生活様式に合った住まいが新築された。とくに大きな変化は燃料革命により竈が姿を消したことである。また農村では農作業の機械化にともない牛馬が不要になって厩が撤去された。これらの変化は土間の著しい縮小を招き、常時土間の存在を意識してきた住感覚に大きな変化を生じさせたと言えよう。屋根材もほとんど瓦になり、茅葺の住まいを残したくても茅場が荒れて維持が困難である。

このような社会状況の変化の中で、伝統的な住まいが文化財に指定されて現地に保存されるとともに、各地に民家博物館がつくられた。この博物館は消滅しつつあった各地の典型的な民家を移築したもので、現在、大規模な施設だけでも一〇館を超える。

民家博物館の先駆となったのは日本民家集落博物館（大阪府豊中市）である。白川村の合掌造りをはじめ、全国各地の代表的な民家など一〇棟あまりが移築・復元されている。いずれも文化財の指定を受けた貴重な資料であるが、茅葺屋根の修理など維持に必要な経費は莫大であり、存続の危機に面している。一度喪失すると二度と入手できないこれらの古民家を残すためには、まず社会の中でその価値が認識され共有化されなければならない。

韓国の済州島に設けられている城邑民俗集落は、実

際に人が生活を続けている集落を博物館とし、住人がガイド役を務めている。古態を残すあるがままの住まいと暮らしを公開するエコ・ミュージアムの要素が認められる。住まいに関わる博物館のあり方として、大きな可能性と魅力を備えているのではなかろうか。

むすび――伝統的な住まいから学ぶもの

伝統的な住まいとそれを取り囲む環境が自然と共生する生活を支えてきた。食料や水、燃料などの材料を周囲の里や里山、屋敷林が発達している地域では屋敷林などに求めてきた。囲炉裏や竈で生じた灰、人や家畜の排泄物は貴重な肥料になった。近代化以前の生活に戻ることは困難であるとしても、伝統的な住まいが環境の保全を目的に自然との共生を考える場になることは間違いない。

なお、高学歴社会は子どもに勉強部屋を与える風潮をつくり出した。同様に、住まいの中に家族のための個室がつくられる。その結果、家族が同じ部屋で共有する時間が短縮され、精神的な絆（きずな）の希薄化を招く傾向にある。家族の食事の場と団欒の場である茶の間が重要になっていると言えよう。

また縁側は農家にあっては乾燥場であり、機織（はたおり）などの作業場であった。そして近所の人が気楽に立ち寄る接客の場であった。しかし四〇年ほど前から縁側が急速に消滅しつつある。さらに都市部では敷地の道路沿いに高いブロック塀を築く住まいが増加している。プライバシーの保護や防犯が目的であるが、結果として地域社会での交流を妨げることになる。物理的に閉鎖的な構造は精神的な閉鎖を投影している。私は縁側に相当する曖昧（あいまい）な空間を住まいの中に創出することが、地域づくりにつながると考えている。

あらためて伝統的な住まいの魅力と可能性を確認したい。

〔参考文献〕
高取正男「住居の原感覚」『高取正男著作集4　生活学のすすめ』（宝蔵館、一九八二年）
宮田登『女の霊力と家の神』（人文書院、一九八三年）
杉本尚次編『日本の住まいの源流―日本基層文化の探求』（文化出版局、一九八四年）
大河直躬『住まいの人類学』（平凡社、一九八六年）
森隆男『住まいの文化論』（柊風舎、二〇一二年）

（もり　たかお・関西大学）